

【特別寄稿】

コンラッドの『ノストローモ』を書き直すこと
—フアン・ガブリエル・バスケス『コスタグアナ秘史』—*

久野 量一

1.

『コスタグアナ秘史 *Historia secreta de Costaguana*』¹はフアン・ガブリエル・バスケス (Juan Gabriel Vásquez, 1973-、コロンビア) が 2007 年に発表したスペイン語の小説である。バスケスはこの作品の前には『密告者たち *Los informantes*』(2004、邦訳 2017) を、後には『物が落ちる音 *El ruido de las cosas al caer*』(2011、邦訳 2016) を、さらにその後には『廢墟の形 *La forma de las ruinas*』(2015、未邦訳) と、10 年と少しのあいだに 4 つの長篇小説を刊行している。そのどれもがコロンビアの歴史をテーマにしたものである。

『密告者たち』は第二次世界大戦後、『物が落ちる音』は 20 世紀後半の麻薬戦争、『廢墟の形』は 1914 年と 1948 年の政治家の暗殺を題材に採っているが、2 作目の『コスタグアナ秘史』ではぐっとさかのぼって、19 世紀前半から 20 世紀初頭までの、内戦が相次いだ時代を扱い、重厚な歴史小説といった趣さえある。さらにこの作品では、パナマの分離独立を頂点とする「コロンビア史」と、コンラッドの『ノストローモ』(1904)における「コスタグアナ史」を二重写しのように読ませる仕掛けがほどこされている。このコンラッドの影は、この小説を他の 3 作に比べて特殊な読み方を可能にしている。

『ノストローモ』といえば、ラテンアメリカ文学界隈では、欧米作家がラテンアメリカを題材に採った作品として知られるが、このようなものと

しては、ほかに D.H.ロレンス『翼のある蛇』(1926)、グレアム・グリーン『権力と栄光』(1940)、マルカム・ラウリー『火山の下』(1947)などメキシコが舞台となった作品がある。コンラッドと同郷のポーランドに目を向ければ、ウィトルド・ゴンブローヴィッチはアルゼンチンに20年以上住んだことがあり、ブエノスアイレスを舞台とした『トランス=アトランティック』(1953、邦訳2004)をポーランド語で書いている。

欧米作家によって書かれた、こうした非スペイン語の「ラテンアメリカ文学」について、アルゼンチンのリカルド・ピグリアは興味深い見方をしている。彼は、ゴンブローヴィッチの『トランス=アトランティック』をあえて「アルゼンチン文学」として、ゴンブローヴィッチを「アルゼンチン作家」として読むのである。ポーランド語で書かれた文学作品をアルゼンチン文学として読む行為には、「アルゼンチン人」によって「スペイン語」で書かれたもののみを「アルゼンチン文学」、そうして編成された「アルゼンチン文学史」を正統なものと見なす既成の見方をくつがえしたり、ずらそうとしたりという意図が込められているが²、ピグリアはそうした批評意識に基づいて、小説『人工呼吸』(1980、邦訳2015)を書いてもいる。

ピグリアが『トランス=アトランティック』をアルゼンチン文学として読んだように、『ノストローモ』もまたコロンビア文学として読めるのではないだろうか。そのように読んだ批評家や作家はいないのだろうか。もちろんバスケスがそうなのだが、その話に進む前に、まずはスペイン語圏におけるコンラッド受容、『ノストローモ』受容についてざっと見ておこう。

2.

コンラッド作品のスペイン語への翻訳の源流をたどると、チリ人のマリアノ・ラトーレに行き当たる。チリ人が翻訳したことと、コンラッドの中篇「ガスパール・ルイス」がチリを舞台にしていることと関係があるのかどうかはわからないが、この人物は、コンラッドが亡くなった1924年にチリの大学の雑誌に『密偵』の翻訳を掲載している。また同同年、オルテガ・イ・ガセー編集によってマドリードで出ている雑誌「レビスタ・デ・オクシデンテ」には短篇「進歩の前哨基地」が載っている(翻訳者不明)。そして翌1925年以降、バルセロナの出版社がコンラッド全集の刊行をはじめ、

コンラッドの『ノストローモ』を書き直すこと

『ノストローモ』は1926年に出ている。この『ノストローモ』の翻訳者はファン・マテオス・デ・ディエゴというスペイン人で、この人物は『西欧の眼の下に』も翻訳したことがわかっている。『闇の奥』は同じ出版社から1931年に刊行されている。20世紀も終わり頃になると、『ノストローモ』や『闇の奥』は新訳も出る。『ノストローモ』は三種あるので書影を掲げて解説しよう。

一般にラテンアメリカでは、『闇の奥』と言えば、ボルヘスが序文を書いたものがよく知られているが、『ノストローモ』と言えば、メキシコ作家でゴンブローヴィッチのスペイン語翻訳者でもあるセルヒオ・ピトルが序文を書いたものが有名である（図版1）。アリアンサ出版が出しているのは、ポケット版で入手しやすいが、これには序文はない（図版2）。そこに来て最近では、『コスタグアナ秘史』によってコンラッドに新たな光を当てたバスケスが序文を書いた翻訳も出ている（図版3、2007年刊行）。今後はバスケス序文版が広く読まれるようになるかもしれない。

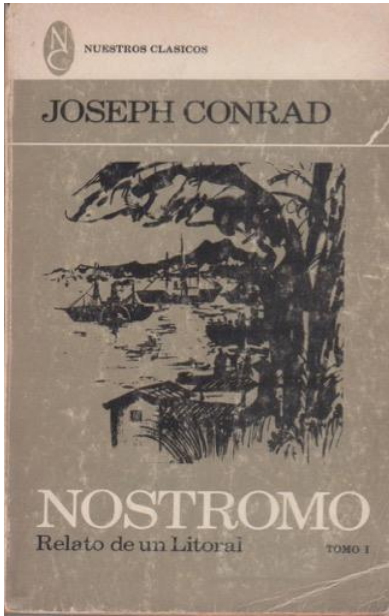
ラテンアメリカ文学におけるコンラッド作品の受容はどうだろうか。

土着的なテーマを書く作家として知られるコロンビアの作家ホセ・エウスタシオ・リベラの『大渦』(1924)は、アマゾン密林地帯の自然の猛威、ゴム園の過酷な労働の実態が暴かれる小説だが、どことなくコンラッドを思わせる。あるいはコスモポリタ的な文脈では、キューバのアレホ・カルペンティエルが『失われた足跡』(1953)で、ニューヨーク暮らしの文明人が南米の川を遡行し、原始的な世界と遭遇するストーリーを描き、ここに『闇の奥』(1899)とのかかわりを指摘するのはたやすい。

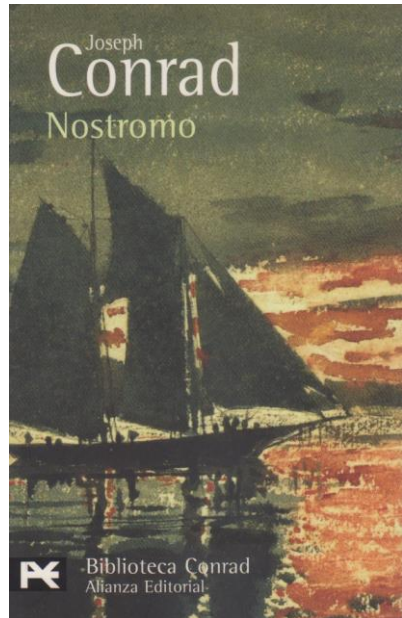
とはいえ、ヨーロッパ的な人物が未開の自然に分け入っていくという設定や、文明と野蛮といったテーマは、20世紀のラテンアメリカの文学ではさほど目新しいものではなく、たとえばウルグアイ出身のオラシオ・キローガにもその傾向は認められる。むしろラテンアメリカ文学にはコンラッド的なテーマと通底するところがあったということかもしれない。

3.

その中では、ボルヘスの短篇「グアヤキル」(『プロディエーの報告書』所収)は特筆に値する。この作品ではコンラッドや『ノストローモ』が出てくる。

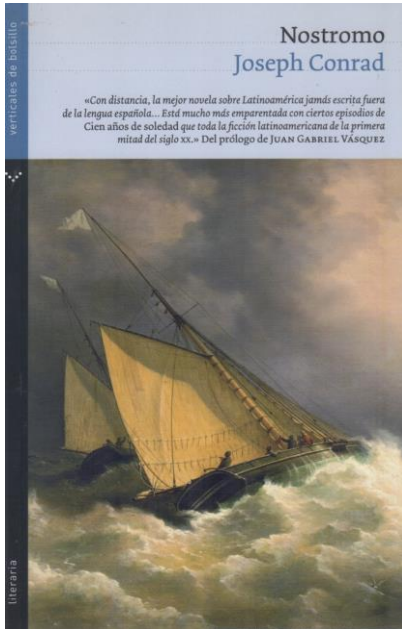


図版1：『ノストローモ 第1巻』
(ファン・マテオス・デ・ディエゴによる翻訳。序文はセルヒオ・ピトル)



図版2：『ノストローモ』
(アルベルト・アデルによる翻訳)

コンラッドの『ノストローモ』を書き直すこと



図版3：『ノストローモ』
(オルガ・ガルシア・アラバルによる
翻訳。序文はバスケス)

といっても、わかる人にしかわからないように、「コンラッド」という名前はおろか、「ノストローモ」も出てこず、与えられるのは、コジェニョフスキ、スラコ、オクシデンタル州といった固有名詞である。しかしコンラッドや『ノストローモ』の読者であれば誰でもわかるこれらの固有名詞が挿入されたこの短篇は、おそらくスペイン語で書かれたラテンアメリカ文学のなかで、『ノストローモ』をはっきりと踏まえたことを示す先駆的な作品と思われる。ちなみにボルヘスはすでに1925年、コンラッドを主題とする詩を書いている³。ボルヘスの最も初期の詩で、『闇の奥』へのオマージュと読める。書かれた時期からすると、コンラッド追悼の意味があるのかもしれない。

さて、短篇「グアヤキル」は19世紀初頭のエクアドルのグアヤキルにおけるシモン・ボリーバルとサン・マルティンの会見（いわゆるグアヤキル会見）がどのようなものであったのかをテーマとする物語である。この会見は、二人きりで行なわれたために、中身が不明で、ラテンアメリカの

独立史上、最大の謎の一つと見なされている。

物語は、この会見の内容を明かすボリーバルの手になる書簡が、ある場所で発見されたところから始動し、それを引き取りに行く役目をアルゼンチン政府からおおせつかったアルゼンチン人の大学教授（歴史学者）によって語られる体裁をとっている。

アルゼンチン人歴史学者は、みずからラテンアメリカ史上最大の謎、グアヤキル会見の内容を最初に知り、それを公にすることを誇りに思っている。それは以下のような台詞に明らかである。

この使命は、わたしが生涯を賭けた仕事、ある意味ではわたしの血である仕事（後略）。[傍点引用者]⁴

この歴史学者の曾祖父は作中ではイシドロ・スアレス——歴史上実在の人物で、ボルヘスの曾祖父——とされ、アルゼンチンの独立戦争に参加している。このような家柄に生まれたがゆえに、歴史学者をして書簡解読の使命を「血」と言わしめるわけである。ところがそこに、やはりアルゼンチンの大学教授だが、こちらは生粋のアルゼンチン人ではない、亡命ユダヤ人歴史学者がその役割を奪おうと割って入ってくる。

こうして二人はボリーバルとサン・マルティンのように、会見を持つことになる。この二人きりの会見の結果、亡命ユダヤ人がアルゼンチン人を説き伏せて書簡の発見場所に旅立つことになる。敗北したアルゼンチン人は、「わたしはプラシド湾に映るイゲロタの峰を見ることも、オクシデンタル州を訪れることもなく」とその経緯を悲しげに記し始めるのだ。

ラテンアメリカ史における「グアヤキル会見」は多くの歴史家にとって関心の対象になってきた。それがついに明かされる時がきた…… ここまでは史実と重ね合わせられる。ところがボルヘスの設定では、いま引用したように、ボリーバルの書簡が発見された場所というのが、カリブ地方の「プラシド湾」にのぞむ「オクシデンタル州のスラコ」で、さらには「ホセ・アベリャノス」のアーカイブなのだ。この短篇にはコンラッドの虚構世界が入り込んできている。あるいはこの登場人物たちは、コンラッド世界、ノストローモ世界に生きているというべきなのだろうか。

コンラッドの『ノストローモ』を書き直すこと

このことによって物語はたちまち虚と実の間に置かれることになるだろう。「ホセ・アベリヤノス」とは『ノストローモ』の登場人物でありながら、作品冒頭に置かれた「作者の覚書」でも言及され、まさに虚実の曖昧な人物なのだ。後述するようにバスケスはこの人物に取り憑かれるのだが、ボルヘスもまたそうだったのだろうか。

いずれにしても、この短篇が提起していることの一つは、「ラテンアメリカ史」はいったい誰のものなのかという問いである。ボルヘスはその問いを、「グアヤキル会見」を解き明かす資格が、その仕事を「血」と言うアルゼンチン人にあるのか、それとも「第三帝国によって追放され、現在はアルゼンチン国籍を有する外国生まれの」ユダヤ人、要するによそ者にあるのか、という出自の異なる二人の争いという形で示している。彼らは正統なラテンアメリカ史の継承者と言えるのか。

この問いは、ラテンアメリカ史を描く資格があるのはラテンアメリカの人間なのか、それともよその人間でも可能なのか、という問いでもあるだろう。となれば、この短篇における『ノストローモ』への言及は、よそ者であったコンラッドがラテンアメリカ史を描いたことをどう捉えるのかを問題にしているのかもしれない。この問いにボルヘスがどう回答を用意しているのかは、短篇を読み解くしかないが、実はバスケスもこの問題に向き合っている。この点は後述しよう。

4.

ところで筆者はラテンアメリカ文学、中でもスペイン語圏カリブの文学に関心を持っていて、コロンビアのカリブ地方にはなんども足を運んだことがある。その目線で『ノストローモ』を読むと、コロンビアのカリブ地方を思いさきずにはいられない。もちろんコンラッドが船乗り時代にこの地方に来たことを踏まえていることによってその思いは強まるのだが、コロンビアのカリブ沿岸の町とスラコの酷似に驚きを覚えざるをえない。特にサンタ・マルタという海辺の町は背後に山脈がそびえ、雪が見える。以下のようなコンラッドの描写からは、まざまざとあのサンタ・マルタの風景が目に見えてくる。

陽光が、立ちはだかるようなノコギリ状をした山脈の壁面の背後から輝き始めると、海岸間近にある森林の高みの上の方に切り立った斜面を作っている黒い山頂の独特の光景がくっきりと浮かび上がる。その頂きの間には白く光るイゲロタ山の山頂が、真っ青な背景の上にその荘厳な姿を現す。むき出しの巨大な岩の塊が、なめらかな雪の冠に小さな黒いしみのようなものをとところどころに作っている⁵。

確かイギリスのテレビシリーズで『ノストローモ』のドラマが製作され、その撮影がコロンビアのカリブ沿岸地方で行なわれたという話を聞いたことがあり、スラコといえばなおのこと、コロンビアのカリブ地方だとみなしたくなる。この地方出身で、このあたりの歴史や文化から多くの作品の着想を得たガルシア＝マルケスは、雪山と海岸が一体となったこの風景はサンタ・マルタしかない、とコンラッドの『ノストローモ』を自分に引き寄せて読んでいる。

実際、カリブ地方に舞台が設定された『コレラ時代の愛』(1985)では、船乗り時代のコンラッドがコロンビア政府に武器を売ったエピソードを通じ、いかがわしい武器商人としての一面をさりげなく盛り込んでいる。小説内の人物の一人とコンラッドとの接触だけで、生身のコンラッドを描き出したわけではないが、ボルヘスとは違って誰でもわかるような書き方をしたガルシア＝マルケスによって、コンラッドがこの地方にいたという事実はかなり広まったのではないだろうか。もっとも、ガルシア＝マルケスはコンラッドがカリブ地方にいたことをさらりと触れただけで、コンラッドをコロンビア文学として読んだとは言えず、それが行なわれるのは、バスケスの登場まで待たなくてはならない。「コスタグアナ」という固有名詞は、そのスペイン語的な響きからしても、スペイン語圏、コロンビアでは不自然ではない。バスケスがタイトルに使ったのはこのようなことも理由にあったらう。

5.

こうして 21 世紀に入り、教科書の出版に強いコロンビアの出版社から作家 100 人を紹介するシリーズが刊行され、その一人に『コンラッド伝』が含まれていた。図版 4 がその本で、執筆者はファン・ガブリエル・バス

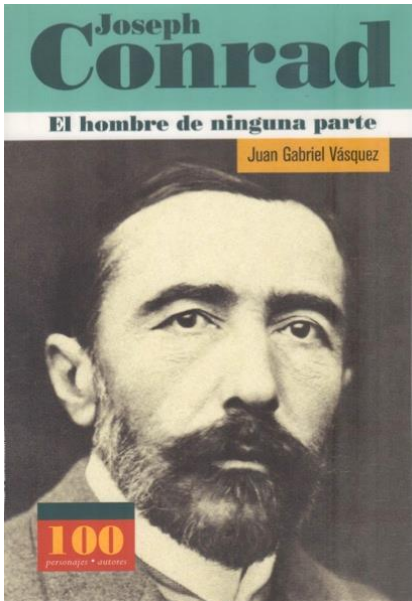
コンラッドの『ノストローモ』を書き直すこと

ケス、先にあげた4冊の長篇小説を発表する前のことである。記憶するかぎり、筆者がバスケスの名前を最初に見たのはこの本の著者としてである。すでにそのときピグリアの「アルゼンチン文学論」を読んでいたので、いざれこういう本の書き手が『ノストローモ』を読み直し、また書き直すことがあるかもしれないと想像したような気もする。

この伝記本は、100ページにも満たない啓蒙目的の本なので研究書ではない。巻末に参考文献とウェブ情報があげられ、そこには名古屋大学の松岡光治のウェブページの言及もあり、執筆の大きな助けになったとバスケスは明かしている。

この伝記執筆が『コスタグアナ秘史』の着想につながる。

この小説『コスタグアナ秘史』の最初の胸騒ぎは、友人に頼まれてジョゼフ・コンラッドの短い伝記を書いているあいだの2003年に起きていたのかもしれない。(中略) ぼくは(中略) コンラッドの書簡と小説を厳密に、そ



図版4：フアン・ガブリエル・バスケス『コンラッド伝——どこからでもない男』

して好奇心に駆られて検討することになった。そしてぼくはある時、このような小説がこれまで書かれていないことはあり得ないと思ひ、間違いなくその確信が、この小説が誰かによって書かれることになった最大の理由である⁶。

バスケスは、19世紀に政変の繰り返す不安定な国、その国の一州の独立が書かれた小説が、パナマの独立から1年後の1904年に出たことをコンラッドの伝記を書きながら知った。コロンビアに生まれ育った者として、『ノストローモ』をコロンビアの歴史小説として読まないことは可能だろうか。おそらく不可能だろう。こうして『コスタグアナ秘史』のような小説が「これまで書かれていないことはあり得ない」という思いがバスケスには生まれる。そこから『ノストローモ』を書き直すこともまた自分の「血」であると思うまで、さほど距離はないだろう。

ところでバスケスは『ノストローモ』への序文で、この小説をこう評価している。

『ノストローモ』は、今になってみると、スペイン語以外で書かれたラテンアメリカについての最良の小説だ。それどころではない。ぼくは時に思うのだが、『ノストローモ』はラテンアメリカ文学のブームの最もはっきりとした先駆的な作品だが、ほとんど指摘されたことがない。(中略)『ノストローモ』というポーランド人が英語で書いた小説は、『ペドロ・パラモ』よりも前に書かれたラテンアメリカのどの小説よりも、人間の行動様式において要を得ており、政治に関して知的であり、ナラティブも現代的である⁷。

バスケスはこのように述べ、『ノストローモ』を、スペイン語で書かれた20世紀前半の小説を押しつけて、現代ラテンアメリカ小説の元祖と位置づけている。この見方こそは、ピグリアばりの、『ノストローモ』＝ラテンアメリカ文学の「正典」とする読み替え宣言と捉えることができるだろう。

『ノストローモ』をラテンアメリカ文学として読むとき、ラテンアメリカ文学につきものの、文学研究者を悩ませる大きな問題が差し出される。それは、ラテンアメリカの文学における歴史と小説の境界線の曖昧さである。ラテンアメリカ文学には、史実を題材に採り、しかもそれを時間的に

コンラッドの『ノストローモ』を書き直すこと

長いスパンでとらえた小説がよくある。そういう小説の場合、読んでいくと、小説でありながらも歴史であると思わせる内容になっていることがよくある。小説を検討するとき、歴史を問題にしているのか、それとも小説として、つまり物語として問題にしているのかが曖昧になる。この曖昧さは、スペイン語につきまとっているものでもある。スペイン語では「歴史 history」と「物語 story」は同じ単語の「イストリア historia」を使う。つまり、語られる内容は歴史でもあり、フィクション性を含む物語でもある。なので区別することが難しいときがある。

ボルヘスの「グアヤキル」には虚実の間に迷い込んだような思いがするが、『ノストローモ』もまた同じような印象を残す。ラテンアメリカの歴史を扱っているのはまちがいがなく、と言ってそれが丸ごと真実ではない、と言って完全にフィクションとは言い切れない何かを備えている。実際、『ノストローモ』についてラテンアメリカの歴史学者である増田義郎は、フィクションであることを認めつつ、コスタグアナのモデルについて様々な国の歴史との整合性を探っている⁸。そのような読みを誘うことから、この小説はそもそもが、ラテンアメリカ文学に位置付けられるべきと強く主張している作品と言えるかもしれない。

6.

さて、『コスタグアナ秘史』の着想の芽はコンラッドの伝記執筆にあったわけだが、いかに書くべきかという道筋もこのときにある程度ついた。バスケスは『ノストローモ』執筆時のコンラッドについて、書斎のランプが燃えて原稿が焼失したことに触れた後、以下のように展開している。

しかし[原稿が消失しても]落胆している場合ではなかった。コンラッドは「救出」という作品を書き続け、彼のカリブの思い出を探り続けた。プエルト・カベリョ、ラ・グアイラ、カラカスからみた風景。コロンビアの沿岸部、そして25年前にたまたま聞いたエピソード。それはラテンアメリカの革命の動乱の合間に銀の積荷を一人で盗んだ男の話だ。しかし記憶はおぼろげだ。この部分についてはコンラッドは種明かしをしている。一方、コスタグアナを描くに依拠した本のうちの一冊は、興味深いコロンビア人によるものだが、このことについてコンラッドは種明かしをしていない⁹。[傍点引用者]

引用前半にあるように、『ノストローモ』の着想が銀の積荷を盗んだ話にあることは、『ノストローモ』の「作者の覚書」を一読すれば誰にでもわかる。このエピソードは印象深く、読者の頭に残りやすい。ところが同じ「作者の覚書」でコンラッドは、『ノストローモ』執筆の際に利用した人物と著書のことは煙に巻いている。バスケスの言うように、コンラッドは「種明かしをしていない」のである。このコロンビア人とは、ボルヘスの「グアヤキル」にも出てきた、あのホセ・アベリャノスである。コンラッドはどのように書いているのだろうか。

コスタグアナの歴史に関してわたしが主として頼りにしたのは、いうまでもなく、大英帝国、スペイン王国その他の諸国の大使を勤めた、尊敬おこなわざる、今はなきドン・ホセ・アベリャノス氏であり、彼の著した公正にして雄弁な『失政五十年史』である。この本はかつて出版されたことはない——読者諸賢はその理由はお分かりになることであろう——そして事実上、その内容を知っているのは世界でこのわたし一人だ¹⁰。

ホセ・アベリャノスというのは小説内の人物であって、実在はしていないはずなのに、コンラッドはこのように書く。彼の著書『失政五十年史』も同様である。ではホセ・アベリャノスは誰で、『失政五十年史』とは何のことなのか。バスケスは伝記を書く時に、コンラッドが種明かしをしていないこの人物に行き当たった。

ホセ・アベリャノスとは、サンティアゴ・ペレス・トゥリアナ、元コロンビア大統領マノサルバを父とし、国を追われ、マドリッドやロンドンで大使をつとめた人物のことである。となれば、『失政五十年史』とは、『コスタグアナ秘史』のなかでもたびたび言及のあるペレス・トゥリアナの『ボゴタから大西洋へ』となるだろう¹¹。

なぜコンラッドは種明かしをしなかったのか。コンラッドは『ノストローモ』脱稿直後、カニンガム・グレアムへの書簡で、『ノストローモ』について、「自分が詐欺師のように感じてしまう」と述べ、その先でこのように述べている。

気が咎めていますのは、ペレス・トゥリアナ閣下のお人柄から得ました

コンラッドの『ノストローモ』を書き直すこと

印象の使い方に関してであります。大兄は私が、あそこで赦し難い過ちを犯したとお考えになりますか。恐らくあの方は、この本のことをご覧になったりお聞きになったりなさらないでしょうが。¹² [傍点引用者]

コンラッドはこのようにペレス・トゥリアナに対して罪深さを感じ、『ノストローモ』を読まないことさえ望んでいる。推測でしかないが、コンラッドにとってペレス・トゥリアナは、小説を書くためのインフォーマントとして大いに情報を得た相手なのかもしれない。「詐欺師のように感じる」というところからさらに想像をたくましくすれば、影の執筆者、ゴーストライターのような存在だったのかもしれない。モデルとなった人物が読んだときに起きる何かを極度に恐れている。

いずれにしても、『ノストローモ』をコロンビア史として読むとき、にわかに重要になってきそうなこの「ホセ・アベリャノス」に言及のある「作者の覚書」は、作品が発表されたときにはなかった一種の「後書き」である。先に掲げたスペイン語版であれ、邦訳版であれ、この「覚書」は1917年になって置かれたと記されている。ペレス・トゥリアナの没年が、その一年前の1916年であることがながしかの意味を語っているのだろうか。

しかしバスケスにとってこのコンラッドの「覚書」は千載一遇だっただろう。ここに見られる煙に巻くような書き方、ここにあるなんらかの闇が、小説の語り手ホセ・アルタミラーノを生じさせたからである。コンラッドが『ノストローモ』で語らなかった部分、つまり「隠された歴史」があったがゆえに『コスタグアナ秘史』は誕生したのである。

7.

先に引いたようにバスケスは『ノストローモ』を先駆的な現代ラテンアメリカ文学と評価しているが、ヘミングウェイにとってのスペイン、アンドレ・マルローにとってのインドシナを引き合いに出して、作家が自身とかかわりの薄い地域を書くことにともなう問題が潜んでいるのではないかと考えている。ここが、現地の作家による「書き直し」が浮上してくるところである。アフリカの作家チヌア・アチェベは「書き直し」についてこう言っている。

1951年か52年ごろ、私は自分の手で書こうと決心した。私にそう思わせたことの一つは、ナイジェリアを舞台にしたジョイス・ケアリーの小説『ミスター・ジョンソン』だった。この作品は高く評価されていたが、ナイジェリアという国の描写だけでなく、ナイジェリア人の描写までもが明らかに皮相だった。それでこの作品が有名なら、誰かがこの作品を内側から書き直すべきなのではないかと思ったのである¹³。

アチェベの言う「誰かがこの作品を内側から書き直す」。この言葉こそは、コンラッドが隠したコロンビア人の存在を発見したバスケスが、「ぼくはある時、このような小説がこれまで書かれていないことはあり得ない」と思った時の気持ちと重なり合う。

自分が内側にいることに気づいたバスケスは、ラテンアメリカ史は誰が書くべきなのかという問いをコンラッドにぶつけることができるようになる。ここで、先に述べたボルヘスの提起した問いと重なり合う。『コスタグアナ秘史』のクライマックス、語り手ホセ・アルタミラーノとコンラッドとの会見は、すでにボルヘスが「グアヤキル」でアルゼンチン人と亡命ユダヤ人の会見で書いている。「グアヤキル」のアルゼンチン人学者は、ポリーバル書簡を独り占めしようとする亡命ユダヤ人に心の中で言っていただろう。「あなたはラテンアメリカ史を盗もうとしている」と。ホセ・アルタミラーノ（＝バスケス）はコンラッドに言った。「ジョゼフ・コンラッド、あなたはぼくを盗んでいる」と。コンラッドが盗んだものとはコロンビアの歴史にほかならない。

バスケス作品における欧米作家による先行作品への言及、それも内側からの「書き直し」をみると、エミリー・ブロンテの『ジェーン・エア』に対するジーン・リースの『サルガッソーの広い海』、シェイクスピアの『テンペスト』に対するエメ・セゼールの『もう一つのテンペスト』といったポストコロニアル文学作品と共通するところが大いにある。考えてみればパナマは環カリブ地域に位置し、『コスタグアナ秘史』もまた、この地域の「書き直し」文学の一作なのである。

8.

『コスタグアナ秘史』は歴史小説だが、コロンビアの歴史だけが語られ

コンラッドの『ノストローモ』を書き直すこと

るのではない。脱線がいたるところにあって、その最たるものがコンラッドにかかわる事柄である。コロンビアと関わるならまだしも、生まれ、父親との関係、船乗り時代、困窮時代、恋愛、自殺未遂、作家となつてからの経済的困難、妻の病気、子育て、コンラッド自身が言及していないこと、病気までが友人や親戚の書簡を借りて語られる。さながら『ノストローモ』執筆のメイキングドラマ、いわゆる内幕と言ってもいい。また、語り手のホセ・アルタミラーノの口ぶりはこんな具合である。

もう一度ここでコジェニョフスキに戻るが、ぼくは恥ずかしくて隠れたい思いで語る。またこの物語がいま向かいつつあるところについてあらかじめお詫びをしておきたい。ぼくのペンがこれほど厄介な主題を書くことになるとは、いったい誰が予言できただろうか？ しかし仕方がない。感じやすい読者よ、胃の弱い人々よ、慎み深い御婦人方よ、無垢な子供たちよ、眼を閉じ、耳を塞いでくれたまえ（要するに、次の章まで読み飛ばしてくれたまえ）。そうしたほうがいいと助言しておく。ここからぼくは、若きコジェニョフスキというよりは、彼の最もプライベートな部分の話をする¹⁴。

こんな風にユーモラスな告白体で暴かれていくコンラッドは、生々しく、俗っぽい人間である。コンラッドを英文学の巨匠として読む専門家が持ち上げて描くのではなく、マニア的な目線から、等身大の人間として、**B** 級な存在として扱うのだ。この小説におけるコンラッドというのは、決して文豪ではない。むしろお手軽に楽しめる存在で、本筋——コロンビアの歴史——とは場合によって無関係である。

お手軽で、ときに本筋とはズレた横糸が歴史小説に織り込まれているというのは、カリブ地域でほぼ同時期に書かれた2冊の小説——ジュノ・ディアス『オスカー・ワオの凄まじい人生』（2007、邦訳 2011）¹⁵とカルラ・スアレス『ハバナ零年』（2012、邦訳 2019）¹⁶——でも見出されるので参考になる。前者は独裁者トルヒーヨおよびドミニカ共和国の歴史を描いたもので、後者はベルリンの壁崩壊以降のキューバ歴史小説の一面がある。ところがそのどちらにも、サブストーリーとして、前者の場合にはボードゲームのオタク青年の生涯、後者の場合にはハバナで電話が発明されたという新説が展開する。

書き手はなぜこうした仕掛けを必要としたのか。もちろん読者のことは念頭にはあっただろう。これらのサブストーリーは読者にとっては親しみやすく、おかげで楽に見知らぬ土地の歴史へ、聞き慣れない固有名詞が満載の物語に入っていくことができる。

しかしそれ以上に、それぞれ自分が属する土地の歴史を描こうとする行為は作家に対し、何らかの責任や重さを否応なしに感じせしめたのではないだろうか。ドミニカ共和国の独裁の歴史、キューバの困窮の歴史を描くということは、容易い課題ではない。ジュノ・ディアスの場合には、バルガス＝リョサの『チボの狂宴』という先行作品があり、これを乗り越える課題を背負うという一面もあった。

彼らには、こうした課題、すなわち重石を動かすためのテコが必要になっただろう。テコを使って重石を動かさないと、両手が自由にならない。ではバスケスにとって重石は何だったのか。それはやはりガルシア＝マルケスだったと考えられる。

『コスタグアナ秘史』からの、以下の引用をご覧ください。

中国人の死体は語るべき物語を持っていた。愛しのエロイーサよ。落ちていてくれ。これは死人が話したり、美しい女が空に昇ったり、司祭が熱い飲み物を飲んで宙に浮くといった例の本ではない¹⁷。

ここで「例の本」とはガルシア＝マルケスの『百年の孤独』を指している。『百年の孤独』では死人が生きている人を訪れたり、絶世の美女が人の見つめる最中に空に昇って消えたり、司祭がチョコレートを飲んで空中浮遊したりといったエピソードが語られる。こういう特徴が「魔術的リアリズム」と呼ばれ、ラテンアメリカ文学の大きな魅力として広まってきた。

ポスト・ガルシア＝マルケスの世代の作家たちは、この「魔術的リアリズム」に匹敵するものを書かなくてはならないという課題を背負わされた。今引いた文章は物語の語り手アルタミラーノの発言ではあるものの、バスケス本人の声として聞いていいだろう（そもそもこの物語が語られている時代に、『百年の孤独』は出版されていないのだから）。多くのコロンビア人、ラテンアメリカ人にとって、小さい頃から教科書で読まれたガルシ

コンラッドの『ノストローモ』を書き直すこと

ア＝マルケス、『百年の孤独』は愛憎の入り混じる対象で、目の上のたんこぶのようなものだ。バスケスより上の世代でも、エクトル・アバド・ファシオリンセ（1958年生まれ）はある小説で『百年の孤独』の冒頭をもじってこんな風書いている。

僕がいつ氷をはじめて見たのかはわからない。というのも僕は冷蔵庫のある時代に生まれたからだ。僕が確かに覚えているのは、ある朝、父のお供をして初めて死体を見たことだ。メデジンはその頃村でもなんでもなかった¹⁸。

バスケスにしてもファシオリンセにしても、ガルシア＝マルケスを避けて通れず、父殺しが必要だったわけである。

ここで最初に引いたピグリアのゴンブローヴィッチ論、それを踏まえたバスケスのコンラッド論に戻る。この二つの例をみると、彼らは正統や伝統といった重荷を逃れるために、別の父親、つまり継父を求めたということではないだろうか。自分の父がロールモデルではないと決めた彼らは、いつも家にいて鬱陶しい父ではなく、自分を自由にしてくれるための、外部にいる参照となる人物を欲した。こうして見つけられたのが、バスケスの場合はコンラッドであり、『ノストローモ』だった。『ノストローモ』をラテンアメリカ文学として読むという行為は、コンラッドをテコにして、コロンビアの、さらにはラテンアメリカ文学の伝統を引っ掻き回すためだったのである。

注

* 本稿は2017年11月12日第3回日本コンラッド協会年次大会（於、東京女子医科大学河田町キャンパス）で行なった講演に基づき、加筆修正をほどこしたものである。また講演内容は、『コスタグアナ秘史』に付した「訳者あとがき」をもとにしていることをお断りしておく。当日、ディスカッサントを引き受けていただいた田尻芳樹氏に深く感謝申し上げます。

- 1 フアン・ガブリエル・バスケス『コスタグアナ秘史』（久野量一訳）、水声社、2016年。
- 2 リカルド・ビグリア「アルゼンチン小説は存在するのか？」ゴンブローヴィッチ『トランス＝アトランティック』国書刊行会、2004年、272-284頁。
- 3 ホルヘ・ルイス・ボルヘス「ジョゼフ・コンラッドの一冊に挟まれた手書きの詩」『ブエノスアイレスの熱情』水声社（斎藤幸男訳）、2008年。
- 4 ホルヘ・ルイス・ボルヘス「グアヤキル」『プロディーアの報告書』（鼓直訳）岩波文庫、2012年、126頁。
- 5 コンラッド「ノストローモ」（『筑摩世界文学大系 50 コンラッド』、筑摩書房、1975年、11頁）および、いくつかのスペイン語版を参照した引用者による訳。
- 6 バスケス「著者による注記」『コスタグアナ秘史』、309頁。
- 7 Vázquez, Juan Gabriel, Prólogo, *Nostramo*, Verticales del Bolsillo, Barcelona, 2007, p.9.
- 8 増田義郎「『ノストローモ』と南アメリカ」『筑摩世界文学大系 50 付録』、筑摩書房、1975年。
- 9 Juan Gabriel Vázquez, *Joseph Conrad: El hombre de ninguna parte*, Panamericana, Bogotá, 2004, p.54.
- 10 コンラッド「ノストローモ」（『筑摩世界文学大系 50 コンラッド』、筑摩書房、1975年、7頁）。
- 11 この辺りの経緯について、バスケスは図版3の『ノストローモ』の序文でさらに詳しく説明している。Vázquez, Juan Gabriel, Prólogo, *Nostramo*, Verticales del Bolsillo, Barcelona, 2007.
- 12 『ジョウゼフ・コンラッド書簡選集——生身の人間像を求めて』（外狩章夫編訳）、北星堂書店、2000年、214頁。
- 13 木村茂雄編『ポストコロニアル文学の現在』、晃洋書房、2004年、9頁。
- 14 『コスタグアナ秘史』、119頁。
- 15 ジュノ・ディアス『オスカー・ワオの凄まじい人生』（都甲幸治訳）新潮社、2011年。
- 16 カルラ・スアレズ『ハバナ零年』（久野量一訳）共和国、2019年。
- 17 『コスタグアナ秘史』、28頁。
- 18 Abad Faciolince, Héctor, *Basura*, Lengua de Trapo, Madrid, 2000, p.58.

（くの りょういち 東京外国語大学 准教授）